博物館学雑誌 第23巻 第1号（通巻27号）23〜35ページ 1997年12月

【論文】

民俗博物館としての「塩の道資料館」の活動

Activity of the "Shio-no-michi Museum" as a Folkloric Museum

森　本　いずみ*
Izumi MORIMOTO

1. 序論

柳田國男によると民俗博物館とは「過去に遡り、各地における先住民が従来行ってきた祭祀、行事および日常生活の変遷や文化の発達状態を示すに足る資料を蒐集陳列する（中略）民衆を対象とする資料を蒐めることがその主たる要件」[1]である博物館である。また、柳田が述べている郷土研究の目的「平民の今までに通って来た路を知るということは、我々平民からいえば自ら知ることであり、すなわち反省である」[2]という主張は民俗博物館の目的にもつながる。この点で柳田は民俗資料によって「日常生活の変遷」を知るだけではなく、それによって地域住民が自らの生活を知ることの必要性を指摘している。

加えて、柳田が郷土研究の展開として「個々の郷土生活を知ることは手段であった。それを総合かつ精確に比較したものから、改めてこの日本国民の生き方働き方を学び、(中略)行く行く人類の通って来た路、若くしてしかも元気よく、常に次の代の変化を孕んでいた進歩の跡を、公平に理解してみようとしていた」[3]と述べている。つまり「日常生活の変遷」を知り理解するということは地域住民が博物館活動の一環である民俗資料の収集・調査・研究とそれに基づく教育活動から地域の生活の特色を究明しその特色について他の地域との比較検証をおこなった上で、地域のなかでどのように生活していくのか生きていくのかを模索することなのである。同時に、地域の生活について検討し、その問題点を明らかにすることも求められるのである。

柳田は郷土研究に基づく博物館論のなかで「村の人に教えたいことは何であるか、及び村の人達の疑問—即ち公の疑問—は何であるか、(中略)この二つの大切な問題に対する答として」[4]博物館が存在しなければならないと述べている。即ち、地域住民が生活課題を解決する場として博物館が存在することを示している。

この点については、伊藤寿朗が地域博物館論のなかで博物館は「日常生活を対象化し、地域に、また社会に存在し、内包する新しい価値を発見し、課題として提示していく」[5]施設であると提起している。この「日常生活を対象化」するという視点は、地域住民が博物館活動を通して日常生活について真剣に考察し生活を営んでいくことである。この地域博物館論ではその利用者を「"個人"としてではなく、さまざまな"場と状況"を背景とした、生きた"生活者"」[6]と定義している。その目的については「地域に生きる人々の日常的な生活課題、もしくはそこから生じる課題に即して、地域資料、あるいは他の関連資料によって地域の新しい価値を発見していく」[7]ことと述べている。つまり、生活の視点を博物館活動の中心に据えることが、地域博物館論の核となっている。

民俗博物館は「日常生活の変遷」について示す民俗資料を収集・展示するだけではなく、柳田が提起するように地域住民が民俗資料によって「日常生活の変遷」を知り自らの生活や生き方について考える

*もりもと　いずみ
横浜市青葉区梅が丘26-2

場となることが求められる。それに加えて、伊藤の地域博物館論の視点である地域住民が日常生活を対象化し生活課題に取り組み、地域の新しい価値を発見することも必要である。

このように、民俗博物館では生活の視点が重要であるが、なかでも住民が自分たちの生活のなかでおこった問題に対峙し、それを契機として自らの生活について捉え返すことを目的として運動をおこし、その結果として設立される民俗博物館がある。このような博物館では、博物館活動を通して住民が自分たちの生活について考え続け、自らの生活があらたな問題に見舞われた場合には、活動を展開させてその問題に立ち向かう運動を起こすことが求められる。また、この運動が多くの地域住民に広がり、その過程で住民各々がその問題を真剣に捉えることが必要である。このような民俗博物館をあえて“生活”博物館と称することができるであろう。

この博物館が地域博物館と比べて、住民が生活上の問題に着目したことが契機となって設立され、またあらたな問題に対しても、それに取り組む住民運動の拠点となることが顕著であるためにあえて“生活”博物館と名づけたのである。

1970年代に、このような住民運動によって民俗博物館が設立された例として、観光開発や工場誘致に対する疑問や反省が契機となり宮本常一の提案により1971年に設立された新潟県小木町の「佐渡国小木民俗博物館」、1972年に設立された福島県田島町の「奥会津地方歴史民俗資料館」、1974年に設立された山口県久賀町の「久賀町立歴史民俗資料館」などをあげることができる。同様に、漁村から工業地帯への移行という地域の変貌に対して1974年に地域の青年会が漁業資料の収集をはじめ1981年に漁業資料館が設立された、千葉県君津市「君津市漁業資料館」[8]もあげることができる。

民俗博物館の設立運動は、民俗資料の意義に気づいた住民が中心となって展開された時、地域に根ざした運動となる。その場合、結果としての民俗博物館よりもその設立過程、運営が重要である。民俗資料が急速に失われつつあることの意味を深く考えた時、民俗博物館設立運動は、自らの生活の場に活動の拠点を作る運動となるのである[9]。

以上のような1970年代高度経済成長による地域の崩壊や変貌に対する危機感が契機となった民俗博物館の設立運動は、この時期の動きであった地域住民の学習の権利の保障を目的とした博物館の設立運動の一環としておこった。加えて、民俗資料にまつわる「日常生活の変遷」を知る地域住民の熱意に支えられて設立された民俗博物館は地域住民の活動の拠点となり得るのである。

その一つの事例として、1973年に新潟県糸魚川市根知地区に設立された塩の道資料館（設立当時は、根知民俗資料館：以下「資料館」と記す）を取り上げてみたい。この事例では、過疎やレジャー開発によって地域が崩壊していくことに対して地域の青年団員が危機感を持ち「村の生活の歴史」を知るという目的で地域のなかの民俗資料を収集し民俗博物館を設立した。

この資料館の特色は、この地域を通り越後と信州の間の物資の交流を担う「塩の道」を巡って「村の生活の歴史」が営まれていたことである。郷土史研究家による「塩の道」研究の成果からの影響と、青年団による民俗資料の収集・調査・研究という博物館活動の実践経過を通して、「塩の道」を巡る「村の生活の歴史」を保存・伝承するあらたな運動への展開が考えられる。同様に、柳田が自らの生活や生き方について考えることの必要性を示したように、地域博物館論が示す地域住民が博物館活動の経験を通して「日常生活を対象化」するなかで地域の生活課題に取り組む契機となるあらたな運動が提起できる。これらのあらたな運動が起こる過程とその運動経緯について検証してみたい。加えて、この資料館の課題と展望についても述べてみたい。

註

1）柳田國男「民俗博物館建設の必要」（日本博物館協会＜博物館研究＞第6巻第1号 1933・p.2）
2）柳田國男「郷土生活の研究法」（『定本 柳田國男集第25集』筑摩書房 1964・p.264）
3）柳田國男「郷土研究と郷土教育」（郷土教育連盟＜郷土教育＞第27号刀江書院 1933・p.68）
4）柳田國男「郷土館と農民生活の諸問題」（農民教育研究会＜農村教育研究＞第2巻第1号 1929・ p.10）
5）伊藤寿朗「地域博物館論―現代博物館の課題

と展望」（長浜功編『現代社会教育の課題と展望』　明石書店 1986・p.246）

6）伊藤寿朗「地域博物館の思想」（＜歴史評論＞第483号 校倉書房 1990・p.13）

7）伊藤寿朗「博物館と地域―地域博物館観の成立をめぐって―」（平塚市博物館＜平塚市博物館年報＞第3号 1979・p.64）

8）君津市漁業資料保存会『はまっぺ』1982、詳細なこの事例についての分析は、君塚仁彦「高度経済成長期における地域変貌と博物館運動―千葉県君津市における事例を中心として―」＜東京学芸大学生涯教育研究紀要 創刊号＞1996のなかでおこなわれている

9）佐野賢治「民具の現代に語るもの」（公評社＜公評＞第12巻 第3号1975・p.61）

2. 資料館の活動経緯

1970年代に高度経済成長の影響からおこった地域の変貌に対して、青年団が危機感をもち「村の生活の歴史」を知ることを目的として根知民俗資料館が設立された。この資料館では、青年団が中心となり民俗資料の収集・調査・研究という博物館活動をおこなった。また、この資料館は存続の危機に見舞われ、青年団員が資料の展示や保存の場所を確保するために悪戦苦闘を繰り返した。青年団員のこのような経験が、その後どのように展開していったかについて検証してみたい。

(1) 地域の歴史的背景

まず、この事例の歴史的背景について述べてみたい。根知地区を通る塩の道とは、日本海沿岸の越後（新潟県）の糸魚川から信州（長野県）の松本までの約三十里（120km）の道のりのことである。越後側から塩や海産物を、牛方やボッカと呼ばれる人たちが、信州まで運んだ道である。この道は、松本街道・姫川街道・糸魚川街道とも呼ばれ、東回りの道と西回りの道があった。根知地区を通っているのは東回りの道である。

この塩の道は、圃場整備で道の跡が消え市道開削のためになくなり現在では、当時の道は一部が残るのみとなっている。

次に、塩の道での輸送の歴史については、1604年に塩を信州へ送る生業をする糸魚川の信州問屋が認可され、塩の道での輸送が制度化された[1]ところからはじまったといえる。牛方は、背に荷物をのせた平均6頭前後の牛を追って、ボッカはショイコ（背負梯子）に荷を負って輸送に従事していた。

塩の道で運搬されたものをあげると、糸魚川からは塩・鰯・鱈などの海産物が運ばれ、信州からは木綿・大豆・タバコ・薬などが運ばれた。牛方・ボッカの仕事は、根知村では14～5歳から60歳の大部分の人々が農業の副業として従事していた。根知村の牛方・ボッカの仕事は、糸魚川から信州との国境の大網村までの荷の輸送であった。

また、根知村の山口集落には関所がおかれた。その関所の仕事は、輸送貨物の監視と境界税の徴収であった。他にもこの集落には、牛方やボッカが泊まる牛方宿や茶屋もあった[2]。このように、塩の道によって根知村の人々の生活が支えられていたのである。

しかし、牛方は1988年前後の県道（現在の国道148号線）の開通による荷馬車の発達とともに消滅した。ボッカも大正・昭和のはじめまでは、便利屋として残っていたものの1934年の糸魚川～根知間の鉄道（大糸線）の開通や県道の改良という他の交通路や交通機関の発達によってほとんどその姿を消した[3]。このように、塩の道によって根知村の人々の生活が支えられていた時代は終わりを告げた。

この地域の生活を塩の道が支えていた歴史は、青年団が民俗資料の収集と民俗博物館の設立運動をはじめるにも、民俗博物館の活動をおこなうにあたっても大きな影響を与えたと言えよう。

(2) 「塩の道」に関する研究

根知地区では、塩の道によって支えられていた「村の生活の歴史」について様々な研究がおこなわれた。これらの成果は、根知青年団の資料館設立や博物館活動に影響を与えたと考えられる。

塩の道について、最初に本格的調査にあたったのは山家克己であった。塩輸送の起源・塩輸送の制度・塩輸送の変遷などについて「糸魚川街道の塩輸送に就いて」（＜歴史地理＞1935年）を記している。

塩の道研究をおこなった郷土史研究家のなかでも、青木重孝と稲田泰策は根知地区とかかわりが深い。同時に、資料館設立にかかわる青年団員が塩の道について学習したり実際に博物館活動をおこなう

にあたって影響を及ぼした人物である。

最初に、稲田泰策は根知中学校の社会科・国語科の教諭であり、後に資料館活動に参加した青年団員を教えた。まず、稲田は根知公民館の協力で古文書調査をおこなった。その方法は、根知地区の60戸余りの農家から史料を集め整理するというものであった。その成果は、1959年に根知公民館から「根知谷古文書 第一集」(ガリ版刷り)として発行された[4]。続いて、それまでに発表した史料にあらたに整理した史料を加えて1963年に「姫川史料髄感録」を集大成として刊行した。

稲田は、根知中学校での授業のなかで生徒に具体的に「どこから、どのような古文書がでた」などの話をし、自分の塩の道研究の過程や経過について語った。このような授業での話が、生徒の記憶に残り地域の歴史に興味をもたせる助けとなった[5]。このような話が、当時中学生であった青年団員が塩の道について学習し、後に資料館を設立する契機となり民俗資料の収集などの博物館活動をおこなう参考となったことが理解できる。

次に、青木は、旧根知村の出身であり小学校・中学校の社会科教員をしながら郷土史研究を続けていた。まず、青木は根知地区仁王堂集落のボッカ経験者から聞き取り調査をおこない「根知ボッカの話」(<高志路>1937年)として発表した。その内容は「明治六年頃からのボッカと問屋との関係・商いの範囲・荷物の内容・ボッカの身支度・歩いた道のり」などについてである。

続いて、1952年に『姫川街道による信越物資の交流史』の研究のために、文部省から科学研究補助金の交付を受けた。この研究は、塩の道とこれにともなう産業・商業・運輸などの調査を進めるとともに、これらに関する江戸時代の資料を収集した。青木は、「人間の生活が古くからどういうふうに発達してきたかその発達の仕方を人間の生活の中に見つけ出していくこと」をこの研究の目的とした[6]。この研究の成果は、1953年に「姫川街道とその周辺」としてまとめられた。その内容は「信州問屋・継荷・関所・交通路・運搬者」についてである。

また一方で1974年からは、糸魚川市の青年講座が開講され根知青年団の団員もこの講座に参加した。開講された講座のなかでも郷土歴史講座・郷土民俗講座の講師を青木が担当した。講座の内容は、糸魚川や根知を中心とした郷土史であった。青木は、実際に自分自身で調査・研究した内容を講座の中で語るので、青年団員は書物を読んで学ぶより講座を受講して直接青木の話を聞く方が理解が深まった[7]と感想を述べている。団員が、この講座を受講したことは資料館でおこなう博物館活動の方向性に影響を与え、その指針となった。

(3) 資料館の設立

根知地区は四方が山に囲まれた山間部の農村であり、その地形から豪雪・地滑り・水害など自然条件にも恵まれず、1970年代には高度経済成長からなる都市化の影響で過疎化に悩まされていた。

この状況のもとで、地域の青年は地域を守るという目的からリゾート開発の反対運動や伝統行事の復活、地域出身者への郷土意識のアンケートなどの活動をおこなった。これらの活動を経験した結果、根知青年団はあらたな青年団活動として民俗資料収集の活動と民俗博物館の設立をおこなうことにした[8]。

青年団では、民俗資料の収集の目的を「村の生活の歴史」がどんなものであったのかを考えること(民俗資料の提供を求めた依頼文「たのむわ」)とし、民俗博物館は「根知地区住民の財産として後世に残す」(根知青年団機関誌<だんぽう>)ことを目標とした。こうして、1973年8月1日に「根知民俗資料館」は開館した。

(4) 博物館活動の過程

具体的に、この資料館の博物館活動として、まず民俗資料の収集は青年団が中心となり根知地区の各集落の各戸を軒並み回っておこなわれた[9]。続いて、調査は青年団員が収集した民俗資料について年代・名称・使用方法等について聞き取り調査をおこなった。同時に、資料を計測しスケッチ(製図)や写真撮影をおこない調査結果に基づいて資料を細かく分類した[10]。

調査の過程で、青年団員は1975年に開講された糸魚川市の青年講座の郷土民俗講座を受講しその講座のなかで民俗調査を経験した。民俗調査は山口集落でおこなわれ全60戸のなかの43戸を訪問しての聞き取り調査であった[11]。この調査は資料館の活動に直接結びついた。例えば、調査のために訪問した家で

直接資料館で収集する民俗資料をもらったり「あそこの家には大切な資料がある」というような民俗資料収集のための情報を得たりした[12]。このように、この民俗調査で聞き取りをした内容や培った人間関係が民俗資料の収集や調査の助けとなった。

研究については、団員は収集・調査した資料から昔の人々の生活形態を考察するために文献で調べたり地域の老人に聞いて事実を究明していった。

青年団は、民俗資料の調査・研究の結果を1977年に『ボッカ民俗資料集』として刊行した。資料館での青年団の民俗資料の収集・調査・研究が、『民俗資料集』の刊行という形で結実したのである。

(5) 資料館存続運動

1973年に根知公民館の二階に開館した根知民俗資料館では1975年に根知公民館の改築による資料館の立ち退き問題が持ち上がった。この問題は資料館の存亡が問われていたため、青年団では「地域ぐるみの民俗資料館を建てる運動」を地域全体で起こすことを目指した。

まず、青年団は地区の総代会に資料館建設のための資金援助を請願した。これに対して、総代会は全戸が米五合を供出して資料館建設のための資金援助をすることを決議した。同時に、糸魚川市に資料館建設に対する援助を申し入れたが、市側は1954年に糸魚川市が根知村と他の1町7村が合併して発足した経緯から根知地区だけに資金援助をすることは他の地区との公平さを欠くので不可能であると主張した[13]。

その上で、市側は民俗資料を市の中心部にある糸魚川市歴史民俗資料館に移すことを提案した。この提案に対して青年団では「糸魚川ではなく、根知にあってこそ民俗資料は価値がある」[14]として資料を移行することを拒否した。青年団がこのように考えるのは「あくまでもこの資料館は村のものであるという立場を守りたい」という意志の表れであった。

まず、青年団は地域住民に自分たちの活動を理解してもらうために1976年11月に根知地区の姫川中学校の教室を使用して「ボッカ民俗資料展」を開いた。続いて、青年団は糸魚川市民に自分たちの活動を広く理解してもらうことを目的として、1977年11月から約一か月間、糸魚川市歴史民俗資料館でボッカ資料約120点を展示した「ボッカ民俗資料展」を開催した[15]。同時に、それまでの活動の集大成として『ボッカ民俗資料集』を刊行し、そのなかで青年団員は「自分たちにとっての資料館の存在意義」を示し、新しい資料館建設の理解を求めた。

この時既に、根知青年団とともに「塩の道」の踏査運動や調査活動をおこなっていた糸魚川市連合青年団も資料館建設運動に協力した。具体的には、市側に認めてもらうために国の重要有形民俗文化財の指定を受けることを目標とした民俗資料収集や市民を対象とした署名運動と資金カンパを支援した[16]。

しかし、1978年公民館は取り壊され民俗資料は使用されなくなった小学校の寄宿舎や1977年に青年団から資料館活動を引き継ぐために結成された根知民俗資料保存会の会員宅に分散して保管された。この状況から、保存会では資料が展示されることを最優先するために資料館の新築を断念した。

その後、保存会は塩の道沿いの「牛方宿」を根知地区全戸や地区外からの寄付で購入・修理して、1980年に再び資料館として開館した。しかし、この資料館の建物も老朽化と豪雪によって傷みが激しく資料の展示・保存に絶えられない状態となった。そのため保存会は糸魚川市の補助金と地区内外からの寄付によって資料館の付近の土地に市内西海地区の木造二階建て茅葺き屋根の民家を移築して1987年新しい資料館として開館した[17]。

このように、青年団員（保存会員）は資料館の存続の危機を体験することによって、あらためて「村の生活の歴史」である「塩の道」とその資料の重要性を理解し、自分たちの手でその保存と伝承をおこなう必要性を認識した。

(6) 「塩の道」に関する活動の展開

根知青年団が、「村の生活の歴史」を知るという目的から民俗博物館の活動をおこないその経験から「塩の道」の保存・伝承の必要性を認識するという一連の経過は、糸魚川市全体や根知地区に影響を及ぼし様々な「塩の道」に関する活動が生まれた。

塩の道踏査運動は、以前から稲田や青木など郷土史研究家が取り組んできた。しかし、塩の道は廃道となって人が通らなくなり草木が生い茂り自然の影響によって崩落したり流失したりして道を確認することが困難なほど荒廃していた。

信州側の白馬小谷で郷土史研究家の田中欣一が踏

査をおこなったことの影響も受けて、塩の道踏査運動は起こった。まず、1971年に根知青年団はハイキングコースを作ることを目的として根知地区山口集落から農道を探索した。団員は、山口から信越国境にあたる白池にいたり白池からわずかに残る道形をたよりに登った場所で塩の道の道標を発見した。続いて、1973年には郷土史研究家の土田孝雄らが東回りルートを山口から大網峠まで踏査したが道を発見することはできなかった[18]。

それまでは散発的におこなわれていた塩の道の踏査の運動は、根知青年団の資料館設立とその活動の影響を受けて「村の生活の歴史」を学ぶ一環としてその必要性が示され、根知青年団・大野青年団・青年会議所・生樹の会などの団体が中心となって、この道を整備して自然歩道にしようという活動がはじめられた[19]。1974年5月26日に、1回目の踏査として根知地区の山口から信州の大網までの約16km を踏査した。この踏査では、地域の老人に道案内を依頼して塩の道の経路が明らかになった。2回目は、大野地区から山口まで約10km を踏査した[20]。

踏査運動と同時に「塩の道」についての調査活動も糸魚川市連合青年団にまで広がり、他の団体も巻き込んで糸魚川ふるさと運動実行委員会が結成された。具体的に、調査はボッカ民俗資料・製塩道具等についての収集と聞き取り調査がおこなわれ、青木重孝がその指導にあたった[21]。なかでも、根知地区での聞き取り調査では資料館の調査では出てこなかった山口の関所の跡の話や大正末から昭和初期にかけてのボッカに従事した人の話を聞くことができ、資料館の活動の参考となった。1974年から1976年にわたる、この調査の成果は『糸魚川街道 塩の道』と題する調査報告書として、1977年に糸魚川市教育委員会から刊行された。

この活動の最中に、先に述べたように1975年に郷土民俗講座の民俗調査が行なわれた。調査地は受講生の「塩の道探索調査に関し、多くの物質的、口伝的資料がある」という希望から根知地区山口集落に設定された。調査方法は、1.「副業の変遷(特にボッカ経験、方法、衣類、道具)」、2.「交易交通（塩の道との関連に留意)」等の調査項目について聞き取り調査を実施した。この調査の結果は、1976年に糸魚川市教育委員会から『民俗調査報告集（1．根知．山口)』として発行された。この講座での民俗調査の経験は、資料館での活動と同様に糸魚川市ふるさと運動実行委員会による調査活動でもその方法や調査内容という点で参考になった。

また、根知青年団の資料館設立やその活動は他の地区の青年団活動にも影響を与えた。1974年には根知地区に隣接し塩の道沿いの大野地区の大野青年団が独自に地区内で「塩の道」の調査を始めた[22]。この調査の過程で収集した民俗資料は、根知青年団に渡され資料館が収蔵した。

このような活動の集大成として、1974年から塩の道市民ハイキングが、塩の道踏査運動と「塩の道」調査活動をおこなった人々の主催、糸魚川市教育委員会の支援で開催された。この活動は、塩の道の保存・伝承を目的として松本まで歩き継ぐことを目標とした。結果的には、糸魚川から松本までの塩の道120km を1983年までに10回に分けて踏破した。また、1982・1983年には糸魚川市押上海岸で揚げ浜式製塩法が復元され採りだされた塩は1983年の最後の市民ハイキングで松本に運ばれた[23]。

これらの活動にかかわった人々は、市民ハイキングの終了後、塩の道を歩く会を設立し1985年以来毎年秋に糸魚川から信州の大網までの塩の道を一泊二日で歩くイベントを開催している。このイベントでは「塩の道」の理解を深めるために塩の道資料館を見学することになっている。このために1986年に建設中の資料館が火災にあった際に、参加者から寄付が寄せられた[24]。

一方で、根知地区では根知青年団が塩の道の踏査がおこなわれた1974年から塩の道の保存を目的とした道なぎをおこなっている。この道なぎは、根知地区の山口から信州国境の大網峠までを毎年雪解け後の5月末から年に3回実施され、現在でも根知青年団の重要な活動の一つとなっている[25]。

また、根知地区でも根知公民館と根知青年団が中心となって、1982年から毎年夏に地区の住民を対象として山口から大網までの塩の道ハイキングを実施している。初回の実施にあたっては、青年団員の事前学習をかねて青年団の青年講座で青木重孝による塩の道の講演会がおこなわれた[26]。

これらの活動の成果を受けて、1996年11月1日に糸魚川市の大野から大網峠までの塩の道が文化庁から

歴史的な価値を現代に残す「歴史の道百選」に指定された[27]。

根知青年団が、民俗博物館の活動を経験し「塩の道」の保存・伝承の重要性を認識したことが、塩の道という道を通じて隣接の大野地区や糸魚川市全域に影響を与え、糸魚川市街から大野地区・根知地区までの塩の道沿いの広い範囲にわたる「塩の道」研究や「塩の道」の保存運動に発展していった。また、この影響は根知地区の住民にも及ぼされた。

以上のような、根知民俗資料館での根知青年団による博物館活動とその活動の経緯のなかで「村の生活の歴史」が「塩の道」に支えられていたという事実が明らかになったことを受けて、1983年に根知民俗資料館は名称を「塩の道資料館」へと変更した[28]。この名称の変更は、ただそれを事実として捉えるのではなく、博物館が博物館自体のテーマを明言したと捉えることができる。

このように博物館がテーマを設定し、それに基づいて博物館活動をおこなうことは、博物館活動の方向性が利用者に明確に示されることになる。それとともに、他の地域の博物館と比較して、他の館とは違うその館独自の特徴・特色を表明することにもなる。

この考えは、柳田が「青年と学問」のなかで述べた郷土研究の展開のように、博物館活動のなかで他の地域との生活の比較・検討をした上で、地域住民が自らの生活や生き方を模索することにもつながる。

註

1）山家克己「糸魚川街道の塩輸送に就いて(上)」(日本歴史地理学会＜歴史地理＞第66巻 第4号 1935・p.379) 他に、青木重孝監修『糸魚川市史5』糸魚川市役所1981、胡桃沢勘司「大町・糸魚川街道の興亡とその背景―ボッカの歩いた道を求めて―」(日本民俗学会＜日本民俗学＞第102号 1975)、大久保茂「大町・糸魚川街道の輸送機関」(日本民俗学会＜日本民俗学＞第102号 1975)

2）『糸魚川市史5』(前掲・pp.239-240) 他に、青木重孝「根知ボッカの話」(＜高志路＞1937)、青木重孝「姫川谷の民俗」(信濃史学会＜信濃＞第13巻 第1号 1961)、「大町・糸魚川街道の興亡とその背景―ボッカの歩いた道を求めて―」(前掲)、「大町・糸魚川街道の輸送機関」(前掲)、「糸魚川街道の塩輸送に就いて(上)」(前掲)、山家克己「糸魚川街道の塩輸送に就いて(下)」(日本歴史地理学会＜歴史地理＞第66巻 第5号 1935)

3）「大町・糸魚川街道の輸送機関」(前掲)、「糸魚川街道の塩輸送に就いて(下)」(前掲)

4）＜毎日新聞＞(新潟版) 1959.5.1

5）根知青年団団長(当時) 田野信二氏からの聞き取り1995.11.12 尚同氏は現在根知民俗資料保存会会長である

6）＜新潟日報＞(上越版) 1952.7.21

7）田野信二氏からの聞き取り1995.11.12

8）拙稿「地域における民俗博物館の役割―『塩の道資料館』の活動を通して―」(全日本博物館学会＜博物館学雑誌＞第19巻 第1号・第2号合併号 1994) のなかで根知地区の地域状況と地域の青年たちによる活動について記した

9）根知青年団団員(当時) 佐藤求氏からの聞き取り1991.10.5

10) 松野功「すすの香を求めて七年―根知青年団の民俗資料館建設のあゆみ―」(糸魚川市教育委員会1980)

11) 糸魚川市教育委員会『民俗調査報告書(1. 根知山口)』1976

12) 田野信二氏からの聞き取り1996.4.5

13) 日本青年団協議会＜日本青年団新聞＞1977.3.1、田野信二「青年の力でつくりあげた村の“心”を伝える民俗資料館」(＜月刊 社会教育＞第319号 国土社 1983・pp.45-46)、糸魚川市役所＜1978年市議会 第一回定例会議事録＞p.190、松野功氏からの聞き取り1990.8.6、田野信二氏からの聞き取り1991.8.4

14) 根知青年団団員(当時) 藤田修氏からの聞き取り1991.10.5

15) 根知公民館＜ふるさとへの道＞1979.1.1

16) 田野信二氏からの聞き取り1990.8.4

17) 「青年の力でつくりあげた村の“心”を伝える民俗資料館」(前掲・pp.49-50)、「すすの香を求めて七年―根知青年団の民俗資料館建設の

あゆみ一」(前掲)、1987.5.3の新資料館開館にあたっての根知民俗資料保存会会長田野信二氏による「ごあいさつ」

18) 糸魚川市教育委員会『糸魚川街道 塩の道』1977・p.170
19) 根知公民館<根知公民館報>第3号 1972・p.2、<新潟日報>(上越版) 1974.6.25、糸魚川教育委員会<教育 糸魚川>No.8 1975・p.8
20) 『糸魚川街道 塩の道』(前掲・p.178)
21) 土田孝雄『越後・糸魚川街道 塩の道』1989、山岸道夫「歩き続けた三年間」(『糸魚川街道 塩の道』前掲)
22) 大野青年団団長(当時)山岸道夫氏からの聞き取り1991.10.6
23) 糸魚川市<広報 いといがわ>No.347 1983・pp.7-8
24) <日本海ポスト>1986.1.10
25) 根知青年団『文集 かたらい』1983・p.17
26) 同前・p.9
27) <新潟日報>1996.11.2
28) 塩の道資料館パンフレット 1987

3. 地域の生活課題[1)]への展開

青年団が、「村の生活」や「村の生活の歴史」を知ることを目的として博物館活動をおこないその結果「塩の道」の保存・伝承の必要性を認識したことが、糸魚川市全域だけではなく、地域住民にも影響を与えた。その活動の影響を受けた地域住民は、日常生活を営むなかで自らの生活課題に着目するようになった。具体的には、地域住民のなかに自分たちの生活環境について考察する動きがおこったのである。

(1) 観光開発の現状

地域住民が、地域で生活を営んでいく過程で資料館の活動から影響を受け、どのように生活課題に取り組んでいくのかについて検証してみたい。具体的には、根知地区でゴルフ場の建設が予定されその計画予定地に塩の道が含まれていた事実に対して根知青年団がはじめた運動について述べてみたい。

最初に、根知地区における観光開発の実状について述べてみたい。根知地区では、冬は豪雪に悩まされ過疎化や住民の老齢化が進み、地場産業ももたないためにしばしば業者による観光開発が計画された。それに対して、地域住民の多くは「地域活性化」のためには観光開発が必要なものであると考えていた。まず、1980年12月20日根知地区山口集落にスキー場が開業した。開発計画では、他に温泉・グランド・テニスコートと一年を通じて観光客が利用できるような施設が計画され、この時ゴルフ場の建設も予定されていた。その後、開発業者の親会社が倒産したが、転売先の業者もスキー場に加えてホテル・ペンション・テニスコート・グランド・温水プールなどの建設を含んだ大規模開発を構想した。

そんななかで、1986年に土地の有効利用を名目にこの業者によってゴルフ場の開発が計画された。まさに、翌年「リゾート法」が制定され全国各地でリゾート開発が盛んにおこなわれた時期であった。また、当時市内の美山でもゴルフ場建設が進められていたことから「雇用の拡大確保に有望な観光産業」として住民の一部では「ゴルフ場建設促進に関する請願」を市議会に提出する動きも起こった。しかし、資金参加の面で地元企業から賛同が得られず、ゴルフ場計画は進展しなかった。

その後、スキー場は二度の転売を経た後、1990年にスキー場を取得した開発業者は、スキー場の整備とともに再びゴルフ場の開発計画を発表した。この時点では、開発業者の親会社が大手の建設会社であったことから、ホテルやテニスコートに加えてサイクリングコース・乗馬コース・キャンプ場・パラグライダーコース・ハイキングコースを含んだ「総合スポーツリゾート地」が計画されていた。そのため、地域でもゴルフ場の建設が現実味を持って捉えられ始めた。このような状況のなかで、開発業者は地域住民に開発の理解を得ることを目的として1990年12月から1991年3月にかけて開発計画についての地元説明会を開催した。

開発計画によると、ゴルフ場予定地に「塩の道」が含まれていた。この事実に対して開発業者は「塩の道は、絶対に侵してはならないものと考えている」として「塩の道を横切らないようにトンネルを掘る」とか「塩の道を歩いている人の安全を考えて高いネットをはる」などの対策を示した。しかし、元来予定地は地滑りが頻発する地帯であるため、これらの工事が実際におこなわれることは困難であると考

えられた。

(2) 生活課題に取り組む運動

この問題に対して、団員は「青年団が二十年以上かけて取り組んできた塩の道が開発予定地に入っているということに、自分たちも真剣に取り組まなければならないと思った」[2]と述べている。そして、これを機会に「地域の人たちに、塩の道を見直してもらおうと思った」[3]ことから青年団が地域にあらたな運動を起こすことの必要性を痛感した。それを受けて、青年団では「塩の道」を保存・伝承するという目的で、ゴルフ場建設に対して地域に問題提起をおこなうことを考えた。

団員がこのように考えた理由は、例えば塩の道資料館が建設中に火災によって屋根を焼失した時に、保存会が茅を収集するのを手伝うなど青年団が資料館活動を援助したり、資料館の活動から派生した青年団活動である塩の道の草なぎやハイキングに参加することによって「村の生活の歴史」における「塩の道」の重要性に気づいたからである。

具体的には、青年団はゴルフ場開発について地域住民がどのように考えているのかを知るために地元説明会の終了後、1991年3月に根知地区の住民を対象にアンケート調査を実施した。

アンケートの結果、地域住民の49.4%がゴルフ場予定地のなかに塩の道が含まれていることを望ましいとは考えていないことがわかった。このように、地域住民の約半数は、塩の道が観光開発の犠牲となることに反対の意志を表明したことから、地域住民が「塩の道」を保存・伝承しなければならないと考えていたことが理解できる。

「塩の道」の保存・伝承から発展して、地域住民は地域の環境問題にも着目した。地元説明会で開発業者は、ゴルフ場での農薬散布については「肥料などを工夫して病害虫に強い芝・樹木にし、極力無農薬に近づけ、病害虫の異常発生時には住民の理解を得て散布する」と説明した。これに対して、アンケートの結果では、農薬散布による水の汚染について住民の52%の人が不安視していた。アンケートは地区説明会の後であったにもかかわらず、説明会では住民の不安が拭えなかったことを示している。他にも、この地区が元来自然条件に恵まれた土地ではなく、森林伐採による保水力の低下が地下水への影響や鉄砲水を引き起こす怖れがあることから、自然環境・生活環境破壊にも住民は言及している。加えて、開発予定地域周辺が地滑り地域であることから、災害発生に対する危機感も表明している[4]。

このように、地域住民のなかにはゴルフ場開発問題を自分たちが生活を営む上での生活課題として捉えるようになった住民もいた。一方で、住民のなかには「具体的に反対するところがないから賛成」とこの問題に対して消極的な住民も存在した。この事実から、青年団ではゴルフ場開発問題について地域住民に理解してもらうために、問題提起をおこなうことを考えたのである。

具体的には、1991年7月から1992年4月まで根知青年団の機関誌<だんぽう>に「シリーズ　ゴルフ場問題」を連載した。そのなかで、急激な過疎化・高齢化が進んでいる根知地区ではゴルフ場開発を含む観光開発を地域振興・地域活性化として捉え雇用の拡大や社会資本の整備という波及効果を期待している現状に対して、他の地域の実例をあげて期待するほどの波及効果が得られないであろう要因を提示した。それとともに、この時期、バブル経済が崩壊したことによって、全国で凍結された開発の例をあげてゴルフ場開発について警鐘を鳴らした[5]。

以上のように、根知地区で青年団が「村の生活の歴史」を知ることを目的として、博物館設立運動をおこない、博物館活動の過程のなかで「塩の道」の保存・伝承の必要性を認識したことが、地域住民にも同様の認識を所持させるにいたった。そこから、地域住民はゴルフ場開発という問題に直面し、生活課題を発見した。同時に、博物館活動に接して育った青年団員は、地域のなかで地域住民に開発の実態を問題提起し生活課題に取り組むことを喚起する運動をおこなった。

これらの運動は、柳田がその博物館論のなかで博物館の目的としている「公の疑問」に対する答えを示すものである。

地域の生活課題を発見しそれに取り組むこのような運動は、地域住民によるあらたな運動への展開が可能となるであろう。それには、自然環境・生活環境破壊の危険性を地域の問題としてのみ捉えるのではなく、普遍的な問題として捉え、その問題に取り組むための運動が提示されることがのぞましい。

この点については、先に述べた柳田國男の郷土研究の視点「個々の郷土の生活を知ることは手段であった。それを総合かつ精確に比較したものから、改めてこの日本国民の生き方働き方」を学ぶという点から、地域住民が、この運動で地域の生活課題について普遍化して考察し、そこから自分自身の生き方や考え方を発見していくことが大切なのではないか。

註

1）生活課題とは、柳田の言葉を借りるならば「村の人達の疑問―即ち公の疑問―」という地域住民が生活を営むなかで発見する疑問である。つまり、住民が日常生活を豊かなものにするために解決しなければならない課題である。それに加えて、伊藤が述べている「日常生活を対象化」すること、つまり住民が日常生活に「解釈を加えること」から導きだされた課題である。

2）日本青年団協議会<日本青年団新聞>1992.4.11

3）根知青年団団員（当時）中村豊氏からの聞き取り1992.12.5

4）根知青年団「ゴルフ場開発に関するアンケート調査」1991

5）ゴルフ場問題については根知青年団<だんぽう>第111号 1991.7.7.―第120号 1992.4.11の「シリーズ ゴルフ場問題」、日本青年団協議会<日本青年団新聞>1992.4.11、根知青年団団長（当時）石塚正士氏からの聞き取り1992.12.5、中村豊氏からの聞き取り1992.12.5に依る。1993年11月1日に、ゴルフ場開発を計画していた業者の親会社である大手の建設会社が倒産し計画は白紙撤回となる。

4. 塩の道資料館の課題

塩の道資料館ではその設立運動と博物館活動の影響を受けて、地域住民が「村の生活の歴史」を保存・伝承する活動に参加し地域の生活課題にも取り組むようになったが、一方で課題も多く残されている。その課題のなかでも学芸員・展示について考察してみたい。

(1) 学芸員の役割

この資料館では根知青年団が青年団活動として民俗博物館を設立し、民俗資料の収集・調査・研究・展示活動をおこなった。青年団は根知公民館二階での設立当初に民俗資料の収集にあたって公民館主事に資料収集の方法や人の配置ついての指導を受けた[1]。また、青木重孝から民俗資料の収集・調査・研究について民俗学からの助言を受けた[2]。しかし、この資料館での博物館活動は開館当初から根知青年団の団員が中心となっておこなってきたのである。このように設立の主体が博物館活動の中心となって活動することは、地域住民による博物館設立運動によって設立された民俗博物館では多くみられる状況である。その後、博物館活動の中心は根知民俗資料保存会に引き継がれた。しかし、塩の道資料館には開館されてから現在まで学芸員が置かれていない。

この資料館が存続の危機に見舞われたため、青年団（保存会）が「資料館の存在自体」を守るための運動に忙殺され資料館の運営や経営に力点を置いてきたことにもよるが、民俗資料の収集・調査・研究・展示という博物館活動が進展していないことの原因の一つとして学芸員が不在であり学芸員の役割を担う存在もいないという事実があげられる。つまり、博物館活動をおこなうにあたってその核となるべき存在がいないことは大きな問題である。

学芸員とは、「実際に、地域社会の実体を把握し、その資料を収集し、分類し、整理し、保存処理を講じ、展示を企画・構成し、それを基に教育活動を展開しうる者」[3]と定義される。

これらの点から、塩の道資料館での博物館活動が学芸員を中心として行われることがのぞましいことは言うまでもない。しかし、現実問題として市からの援助もなく根知民俗資料保存会がこの資料館の運営・経営をおこない財政面でも入館料だけで運営されている現状では学芸員を置くことは困難である。このため学芸員が担うべき役割を学芸員のかわりとなって担い博物館活動の核となる存在が必要となるであろう。

それでは、この資料館では誰がどのような形で学芸員の役割を担うことが考えられるであろうか。まず、考えられるのは博物館活動を保存会の会員が中

心となって、地域住民が継続的におこなうことがあげられる。現在塩の道資料館では収集した民俗資料約2000点の資料台帳を作成しなければならないという課題がある。また、民俗資料の収集・調査・研究も継続して実施されなければならない。これらの活動を地域住民によって行うことが提案できる。

地域住民は青年団による塩の道資料館の博物館活動や資料館存続運動、またそれらの活動から展開していった「塩の道」を保存・伝承するための運動やゴルフ場建設計画による地域の生活課題に対する取り組みを経験して「村の生活の歴史」を知ることの意味について理解を深めていると考えられる。その上で、地域住民が、かつて青年団が民俗資料の調査の過程で経験したような民俗講座や民俗調査を経験して技術的な面を学習することで、博物館活動を担うことが可能となるであろう。

地域住民が博物館活動の核となり学芸員の役割を担うことは、その活動から「塩の道」の保存・伝承や地域の生活課題への取り組みと同様のあらたな視点や運動に発展する可能性も十分に考えられる。

(2) 展示活動への提起

民俗博物館、特に地域の住民運動によって設立された民俗博物館では設立とそれに続く民俗資料の収集に力点が置かれ、展示が資料の収蔵のような状態となっている事例が多数存在する。見学者に公開する展示の機能と資料を保存する収蔵の機能は明確に区別するべきである。塩の道資料館でもその展示方法はボッカ資料約850点と生活資料約200点の民俗資料をただ並べているだけで「村の生活の歴史」を知るためにも、理解しやすい展示とすることが必要である。展示活動は、資料の収集・調査・研究活動に基づいておこなわれるべきである。そのために展示活動は博物館の“顔”として、その博物館活動の成果を示すものである。つまり、「博物館が個性を発揮するまず最初の場は展示室であって、それを支えるのはまず学芸員の研究成果である」[4]と言えるのである。

民俗博物館では、民俗資料は展示活動によってそれ自体の属性を示すのではなく、それぞれの民俗資料の展示から「村の生活」や「村の生活の歴史」について表現することが目的とされているのである。つまり、民俗博物館ではありがちなことであるが「村の生活の歴史」を知るということが、単に民俗資料を見て「村の生活」を回顧するという感慨に集約されるべきではない。

民俗博物館であっても、「展示に際しては（中略）社会的・政治的背景の説明が不可欠である」[5]ということは、言うまでもない。同時に、歴史的背景についての説明も必要であるところから「根底には、必然的に特定な歴史的観点（史観）がなければならない」[6]のである。

また、これらの点をふまえて、展示活動にあたっては「負の遺産、人類の愚行のあとも、感覚としては忘れたい事実なども、後世まで忘れさせてならないことがたくさんある。（中略）、博物館はそれを避けてはなるまい」[7]という指摘も考慮しなければならない。

塩の道資料館の展示活動においても、ボッカや牛方に支えられていた「村の生活の歴史」を単に回顧するだけではなく、ボッカや牛方の仕事は冬の厳しい自然のなかでは危険がともない命がけのものであり、そのような事態でも村の人々が生活のためにそれらの仕事に従事せざるをえなかった村や社会の状況についても展示する必要があるであろう。

その上で、展示という博物館活動が利用者にとって学習の機会となるためには、民俗博物館においても展示活動が「歴史をどうつくるかを日常生活の中で意識的に位置づけるための動機づけの場となることをめざすべき」[8]である。つまり、展示活動が利用者にとって自分たちが地域でいかに生活しいかに生きていくかということと、合わせて生活していく過程の社会的・歴史的背景についても考える契機となることが必要であろう。

これらの点を考慮に入れた上で、展示活動は博物館の“顔”であるところから資料の収集・調査・研究活動に基づいた博物館の主張や個性が、展示活動で示されることが必要である。塩の道資料館では「塩の道」を保存・伝承し地域の生活課題に取り組むという、その博物館活動の過程から発展した運動の主張を展示のなかで展開することも可能であろう。

以上のように、塩の道資料館の課題を解決していくには、柳田の博物館論である博物館が「公の疑問」に対する答えとなるように常に配慮することが必要であろう。

註

1）根知公民館主事（当時）北村秀成氏からの聞き取り1991.9.3
2）田野信二氏からの聞き取り1996.4.5
3）後藤和民「博物館の運営と職員」（伊藤寿朗・森田恒之編『博物館概論』学苑社1978・p.379）
4）鷹野光行「制度からみた博物館」（全日本博物館学会＜博物館学雑誌＞第22巻第1号・第2号合併号　1997・p.43）
5）金子淳「展示批評　くにたち郷土文化館企画展『人生儀礼の諸相―誕生・結婚・葬儀をめぐる人々―』」（地方史研究協議会＜地方史研究＞第47巻第2号　1997・p.95）
6）後藤和民「館種別博物館における展示と展示法 歴史系博物館」（新井重三・佐々木朝登編集責任『博物館講座第７巻 展示と展示法』雄山閣　1981・p.179）
7）塚本学「歴史学研究と歴史系博物館・資料館」（＜歴史評論＞第483号 校倉書房　1990・pp.28-29）
8）田辺悟「民具展示の今日的意義と構成」（横須賀市自然・人文博物館＜横須賀市博物館報＞第31号　1984・p.39）

5. 結論

最後に結論として、これまでの論のなかで明らかになったことについて示してみたい。

柳田國男によると民俗博物館は「日常生活の変遷」を示す民俗資料を収集・展示する博物館であるが、その機能は民俗資料の保護に限定されるべきものではない。柳田は民俗博物館とは民俗資料により「日常生活の変遷」を知ることによって地域住民が自らの生活や生き方について考える場であると示している。それに加えて、柳田は地域住民が地域の生活について検討した上で明らかとなった生活課題を解決する場としての民俗博物館の役割についても言及している。

この論に加えて、伊藤寿朗による地域博物館論の博物館が「日常生活を対象化」する視点で生活課題に取り組むことが、地域に新しい価値を発見することにつながるという主張にも民俗博物館は依拠しなければならない。

このような民俗博物館の事例として、1970年代の高度経済成長の結果、地域が過疎や地域開発などの問題を抱え、それに対する危機感から地域住民の運動で設立された塩の道資料館を取りあげた。

この事例の最大の特色は、この地域を通る「塩の道」がこの「村の生活の歴史」を支えていた事実である。この歴史に対して、1930年代から郷土史研究家によって塩の道研究がおこなわれ、研究はその後も続けられ現在にいたっている。青年団員は長年にわたり塩の道研究にかかわってきた郷土史研究家から、学校教育や糸魚川市の青年講座で直接指導を受け影響を与えられた。それとともに、民俗資料の収集・調査・研究という博物館活動を通して、青年団は「塩の道」の保存・伝承の必要性を認識した。

その結果、「塩の道」を保存・伝承する活動は、糸魚川市全域に広がり、糸魚川市連合青年団を中心として「塩の道」の踏査運動や「塩の道」に関する調査活動に発展した。同様に、「塩の道」を保存・伝承する活動は根知地区のなかにも広がっていった。これらの活動の結果「塩の道」は文化庁から歴史の道百選に選ばれた。

これに続いて、現在保存会では塩の道資料館で収集した民俗資料のなかでも「塩の道」の運搬に従事した運搬者の用具である「ボッカ資料」が国の重要有形民俗文化財の指定が受けられることを目指している。1970年代に住民運動によって設立された多くの民俗博物館の収集資料が、既にこの指定を受けており、保存会では指定を受けることが自分たちのこれまでの活動の集大成となると捉えている。

これまで検証してきたように、塩の道資料館では青年団員（保存会員）を中心とする地域住民が主体となり博物館活動をおこなってきたが、地域住民は地域で生活を営むなかで生活課題に直面した時、博物館活動のなかで培った生活の視点に基づきその課題に取り組むためのあらたな運動を起こした。このあらたな運動は、博物館活動を越えた地域の運動へと発展していく可能性を有するものであった。

具体的には、根知青年団がゴルフ場建設にともなう「塩の道」周辺の環境破壊を危惧して、地域住民とゴルフ場建設について考える場を持とうとした。青年団はアンケート調査等によって地域住民の意識を掘り起こし、それによって住民たちのなかに自ら

の生活環境を考えようとするものもでてきた。しかし、一方で開発の中身について詳細なことを知らない住民のなかには知らないが故に建設に賛成する住民もいた。このような地域の状況に、青年団員は危機感を抱き過疎化や老齢化に悩まされている根知地区では、地域活性化が求められているもののゴルフ場建設のような開発が必ずしも活性化につながるのではないことを地域に示したのである。青年団では、建設反対運動を地域の住民運動とすることを目標とした。

以上のような運動は、柳田がその博物館論のなかで述べている、「公の疑問」に対する答えを示すという博物館の目的につながるのである。また、柳田が郷土研究の展開として示しているように、このような運動では生活課題を地域の問題としてのみ捉えるのではなく普遍的な問題として捉えることが必要である。そして、地域住民が地域の問題のみならず、自分たちの生き方にまで言及することがのぞまれる。

一方で、塩の道資料館では学芸員の不在と展示の改善という課題が存在する。これに対しては、学芸員が置けない現状から根知民俗資料保存会を中心に地域住民が学芸員の役割を担うことが提案できる。この提案は、地域住民があらたな活動をおこす契機と成り得る。また、展示についてはこの資料館独自の主張を展示のなかでおこなうことが求められる。

1970年代に設立された多くの民俗博物館がそうであるように、博物館が地域住民による設立運動によって設立されたという事実は、その過程とともに地域に大きな意味をもたらすことは言うまでもない。しかし、博物館が設立されたという事実を結果として捉えるのではなく、博物館がどのように活動しその活動がいかにしてあらたな活動に展開していくのかということが重要なのである。

最後に、柳田の民俗博物館論と伊藤の地域博物館論に依拠して、あらたな民俗博物館像を提起してみたい。まず「日常生活の変遷」を示す民俗資料を保存・伝承する核として、またそれを調査・研究する拠点として機能する。加えて、柳田がその博物館論で述べているように「公の疑問」の答えとなる博物館の主張をもつ。同時に、地域博物館論で述べられているように博物館活動のなかで「日常生活を対象化」するとともに生活課題に迫りそこから新しい価値を発見する。その結果、生活の視点に基づき地域住民の主体的な意識に根ざした運動をあらたに生み出す。つまり、柳田がその郷土研究のなかで述べているように自らの生活や生き方を模索することを目的とする。このような“生活”博物館が提起できる。